

即興を中心に据えたダンス授業における観察と言語化が大学生の自己理解に及ぼす影響 ～質的分析を通して～

岡本悦子（就実大学）

湯澤美紀（ノートルダム清心女子大学）

【研究目的】

ダンス授業における対話的な学びには、動きを通して交わされる非言語的対話と共に、動きに関する感覚や印象についての言語化を基礎においた言語的対話が含まれると考える。ダンスにおいてはリアルタイムで自己の身体の全体像を客観視することができないことに加え、自由度が高く具体的な手がかりに乏しいと捉えられ易い即興・創作表現では、観察者の言語表現によるフィードバックが、ダンス授業における学生の学びの姿をより可視化しうると考える。本研究は、対話を重視した授業における学習者の振り返りの言語（省察）をもとに、ダンス授業を通じた学生の育ちのプロセスを明らかにすることを目的とする。

【研究方法】

本研究では、ダンス未経験者9名に対して行った15回のダンス授業を総括した各自の省察を時系列で捉え、そのプロセスを明瞭化するために、複線径路・等至性モデル (Trajectory Equifinality Model 以下TEM)を用いて分析した。

ダンス授業は、201×年において、第一筆者により立案・実施された。同授業においては、心身で発想する即興が、創作の基盤にあると捉え、ソロや数人での即興を中心に行った。その際、毎時相互に動きを観察し合い、ワーク後に印象や問い等を言語化して共有する時間を設け、表現者と観察者が対話・交流を通して創作する機会を創出した。

TEMは少数の対象者の心的変化について時間的経過を軸に記述できる点が特徴であり、本研究の目的と合致する。分析手順は生データを1)切片化し、2)内容を端的に符号化し(1次コーディング)、それを3)時系列で配置し、4)類似したカードを分類して概念をつけ、内容の関係性をネットワーク化(2次コーディング)、5)TEM概念の生成を経て、6)俯瞰的検討を行うというものである。

【結果】

全員のTEM図を通して、共通する学びのプロセスは次の通りである。

ダンス授業を通して得られた自己理解

授業開始当初は大半が身体を晒して人前で表現することへの「緊張、羞恥心、緊張と不安、戸惑い」や即興についての「定型へのこだわり」「正解がわからないことへの忌避感」といった苦手意識をもっているが、授業を経るごとに自分には思

いもよらぬ他者の「発想や動きの引き出しの多さ」を観察して驚き、また定番ではないが「不思議と引き込まれる」個性の発見を伴って、表現の多様性を認識するに至り、やがて「(即興・創作の)正解は自分で創るもの」「自分で考えて表現することが楽しくなる」「新たな成長の実感」と展開しており、「自己理解」が共通したテーマであることが読み取れた。

苦手な即興に対峙する葛藤のポイント

葛藤は「先行研究による客観的裏付けを要する研究活動と身体表現の違い」や「文章表現と比較した身体表現の伝達精度の問題」、「予め与えられた動きを再現し習得する定型ダンスと即興ダンスの違い」による混乱から生じているとみられた。

葛藤を経て掘り起こされた気づき

葛藤のプロセスを経て、「理性で説明できない感情を伝えるのが身体表現」「身体表現は伝達性において曖昧で拡散的だ。意図した内容がバラバラに受け取られてよいのかという疑問」「(ペア即興の)予想外の駆け引きにより想像力が刺激された」「協調と主張がかみ合った時、作品はよくなる」といった身体表現そのものへの理解の深化に繋がる気づきが掘り起こされていた。更に、学習を自らの生き方に投影させて「対人関係の乏しさの克服」や「思考の柔軟性の獲得」といった新たな成長感につながる気づきもみられた。

葛藤や気づきに影響を及ぼす要因

TEM図には、葛藤や気づきに直接影響を及ぼしたのものとして、「他者に向けたエネルギー」「自己に向けたエネルギー」「他者と融合の試み」などが具体的なきっかけとして表現されていた。それらから派生し、相互に影響しつつ葛藤や気づきのプロセスが生まれるといった構造が見られた。

【考察】

本研究は観察と対話を重視したダンス授業をダンス未経験者に実施し、学生が自己受容していくプロセスが、学生の内省的な省察レポートを元にTEM分析によって解明された。

対人関係や課題への不安を抱く学生が他者の動きを観察し、動きを言語化して共有し理解を深めることを通して、他者の魅力的な個性を発見していき、多様な感性の価値観を形成するうちに、自己をも受容していく過程が明らかになった。

【今後の課題】

本研究は複数の経路が到達する等至点「自己理解」の流れを大まかに捉えたものであり、複雑な経路や個別経路のパターンの違いを考察するには至っていない。また、観察や言語化については「観察の観点」や創作の意欲を削がない「言語化・対話のルール」といった存在について経験的に理解しているが、整理できておらず、今後の課題である。